

(2020年) 10月30日

JR 島本駅西地区まちづくり委員会
事務局御中

まちづくり委員会公募委員 五江渕弘臣

まちづくり委員会へ提言と資料の提出

JR 島本駅西地区まちづくり委員会の次回（第4回）のテーマのひとつ「歴史的視点」への参考資料として、当研究会顧問である水無瀬離宮研研究者の豊田裕章氏より提言書と資料を預かりましたので提出させていただきます。よろしくご査収ください。

記

- ・まちづくり委員会への提言書 ……1部
- ・添付資料「水無瀬殿（水無瀬離宮）に関する豊田の研究の関連事項の要約版」…1部
- ・参考資料「後鳥羽上皇の水無瀬離宮と桜井」（令和2年7月4日講演資料） ……1部

(備考)豊田裕章氏 略歴

大阪大学招へい研究員。大阪大学博士(文学)。専門は歴史学。主要研究テーマは、東アジアの都城・宮室と礼制との関わり、水無瀬離宮をはじめとする離宮や有力貴族の山荘、北摂の地域史。

【水無瀬離宮に関する近年の主な論文】

- ・「鳥羽上皇の水無瀬殿（水無瀬離宮）における政務の裁定について」
古代文化. 2020. 71. 4.
- ・「水無瀬離宮（水無瀬殿）の空間構成と機能について」
京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第32号. 2019.
- ・「後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）の構造とその選地設計思想について」
京都大学人文科学研究所『天と地の科学—東と西の出会い』2019.
- ・「水無瀬殿（水無瀬離宮）の都市史ならびに庭園史的意義」
奈良文化財研究所研究論集 18『中世庭園の研究—鎌倉・室町時代—』2016

など

以上

令和2年10月27日

JR 島本駅西地区まちづくり委員会御中

大阪大学招へい研究員
豊田裕章

JR 島本駅西地区について歴史的視点からの提言

水無瀬離宮がかつて存在した水無瀬の地域は、当時においては日本有数の名勝でした。本提言は、大阪府島本町の桜井地域を中心に、島本町域の歴史的景観や史跡・遺跡を活用したまちづくり、都市デザインに関して提言を行ったものです。

なお、本提言には一部、ここ数年、水無瀬殿(水無瀬離宮)研究会の運営委員の間で話し合ってきた内容も、ご本人の承諾を得て加味しています。

私は、後鳥羽上皇の水無瀬殿を複数の御所群や関連施設を島本町域に広く展開するものであることをこれまでの研究で述べてきました。

今回、島本町桜井の尾山遺跡の発掘調査で、水無瀬殿と関連する遺構が検出されたことにより、桜井地域が水無瀬殿に関連する地域であることが確定されました。また、水無瀬山が桜井背後の山である可能性もさらに高まりました。尾山遺跡の性格に関しては、今後の周辺地域も含めた詳細な調査成果が待たれるところであります。

ところで、尾山遺跡の西の山麓部に、岬状の州浜のような形状を有する農地があります。当該農地は、遺跡分布図に越谷遺跡として示される範囲内にあり、当該農地に西接する場所からは、平成3年度から平成5年度まで行われた名神高速道路内遺跡調査会による発掘調査によって(越谷遺跡第2地区)、鎌倉時代の大量の遺構や遺物が検出されています。また、当該農地周辺、とりわけ御所池は、昭和30年代に庭園史研究の第一人者である森蘊氏によって、平安時代初期の宮苑遺跡である可能性が指摘されていました。

当該農地の約600m北東の場所では、平成26年度に島本町教育委員会の発掘調査によって、鎌倉時代の水無瀬殿に関連するとされる庭園遺構(西浦門前遺跡)が検出されています。また、今回、尾山遺跡から水無瀬殿に関連するとされる遺構が発掘調査によって検出されました。

これらの点よりみると、岬状の州浜の形状を有する当該農地は、水無瀬殿に関連する鎌倉時代の庭園遺跡である可能性がよりいっそう高まったと考えられます。

できれば、このような州浜状の形状を残す農地が、本来一つの池であった可能性の考えられる御所池とともに、土地所有者の方々や建設会社、地域住民の方々等のご理解をいただくことにより、島本町等によって、住民や見学者の安全に配慮がなされた形で、歴史的景観や眺望を体感する公園として保存活用される事が望ましいと考えます。もし開発が行われる場合も、当該農地の地形が盛土などにより保存されることが望ましいと考えます。

また、桜井にまで関連施設を展開する後鳥羽上皇の水無瀬殿は、対岸の男山や東側に開けた眺望を重視した設計思想でなされている可能性が高く、また、桜井の背後の山が、後鳥羽院政期の和歌に詠まれた水無瀬山である可能性も高く、このような景観や眺望を活かした町づくりが望ましいのではないかと考えます。

このような「歴史的景観や史跡・遺跡を活用したまちづくり」というコンセプトが、桜井地域だけではなく、島本町域全体の都市政策に反映され、それが都市デザインの基調となることは、島本町全体の付加価値を高めることにつながると考えます。

水無瀬殿の根本となる御所(本御所)の跡地と伝えられる水無瀬神宮、建保年間に新たに造営された新御所の跡地と推定される現在の関西電力水無瀬住宅の辺り、本御所と新御所をつなぐ馬場や馬場殿と呼ばれる重要な関連施設の存在した可能性が高い第一小学校西側の農地の辺り、山上御所の候補地である鶴ヶ池とその周辺などが、テラスで風景を眺めることのできる島本町民ふれあいセンターを介して、御所池や南側の州浜の形状を残す場所とつながるように、シーケンスデザインを重視した都市整備がなされれば、島本町民や島本町を訪れた町外の見学者が、これらのポイントを散策することにより、約800年前の水無瀬殿を景観や眺望を楽しみながら面的に体感できるような町づくりになるのではないかと考えます。

このようなまちづくりを行うためにも、水無瀬殿や関連する遺跡が国史跡などに指定されることとともに、国や大阪府からの支援を受け保存活用される必要性もあると考えられます。

なお、今回の土地整理事業では、町外から水無瀬殿跡の見学に訪れた人々が、散策を行う起点となるような駅前広場の整備も大きな意味を有すると考えられます。

桜井を含めた島本町の美しさは、かつて谷崎潤一郎が小説『蘆荊』の中での的確に描写しています。そのような美しい景観を有するこの地域は、さらにさかのぼって後鳥羽院政期においては、重要な政治的、文化的拠点であり、日本有数の名勝でした。それは『新古今和歌集』の巨人である後鳥羽上皇がこよなく愛好した場所であり、藤原定家が頻りに訪れ自らの日記である『明月記』に詳しく記した場所でもあります。現在は大阪近郊のベッドタウンの観を呈している島本町は、およそ800年前には日本の政治や文化の中心となる典雅な場所だったので

す。

このような重要な歴史的景観や史跡・遺跡がまちづくりに活かされ、将来の日本国民にも継承されることが重要であると考えます。

以上

【添付資料】水無瀬殿（水無瀬離宮）に関する豊田の研究の関連事項の要約版

現在の大阪府三島郡島本町には、かつて後鳥羽上皇の水無瀬殿（水無瀬離宮）が存在した。後鳥羽上皇は多数の離宮を所有したけれども、高陽院、二条殿などの本所となる御所を除いては、上皇の訪れた頻度や滞在期間の上で、この水無瀬離宮は他を凌駕している。

従来の水無瀬離宮に関する研究では、水無瀬離宮を単体の邸宅であるとして、水無瀬神宮の場所にあったものが、大洪水で現在の関西電力社宅の辺りに移されたとするべくぜんとした認識であった。しかし私は平成20年以来、この離宮の研究に取り組む中で、この離宮は単体の邸宅のような小規模なものでなく、次に述べるような、鳥羽、白河、平泉、福原、鎌倉などと並ぶような中世都市であったことを見出した。

水無瀬殿は、後鳥羽上皇の近臣であり内大臣であった源通親の山荘を離宮とした第1期（正治2年1200～元久2年1205）、寝殿の改修や上皇の御願寺である蓮華寿院が建立された第2期（元久2年1205～建保4年1216）、新御所や山上御所が造営された第3期（建保5年1217～承久3年1221）と次第に拡充された。

文献史料からは、この水無瀬殿に、本御所・新御所・南御所（菌殿）などの複数の御所、馬場殿・小御所・長舎状建物である長廊などの附属施設、山側に設けられ庭園施設をともなった山上御所、上皇の御願寺である蓮華寿院などが設けられていたことがわかる。また、この地域には六条宮雅成親王の御所や、源通親、大炊御門頼実、尊重僧都などの近臣の宿所もあった。とりわけ、源通親の宿所は湧泉のある邸宅であったことが、「内府泉」と呼ばれていることからうかがえる。そして、伝聞ではあるけれども、この地域に京の重要な流通経済拠点である魚市が移設されたことを示す記事もある。また、桜井寺、衆生寺などの寺院もあった。

これらの遺跡は現在の水無瀬神宮の周辺だけでなく、島本町域に広く展開していたものと考えられる。平安・鎌倉時代の平安京内の遺構は、京が中近世の都として存続していたことから、後世に深刻な破壊を受けている。これに対し、水無瀬は、田園であったため、都市化がなされてからも地下深くまで掘り下げて開発がなされていない場合も多く、水無瀬殿に関連する遺構のかなりの部分が、今なお地中に良好な状態で残されていると考えられる。

後鳥羽上皇の治世は、日本の歴史にとって大きな画期となる時期である。水無瀬殿は、平安京外にあり、しかも山城国外にあるにも関わらず、上皇の滞在時はここで政務の裁定が行われることもあった。上皇滞在時の水無瀬殿は、京の高陽院と同様に、日本の政治的中枢と言っても過言ではない場所であったのである。

ここに離宮が営まれた背景として、明媚な風光が大きな関わりを有している。特に淀川対岸の男山に対する眺望は、選地設計がなされる上でも大きな意味を有していたと考えられる。

この水無瀬殿がかつて存在した大阪府三島郡島本町は、第2次世界大戦後、急速な都市化が進んだ。しかし、水無瀬殿が存在した当時を彷彿とさせる歴史的景観は、すべてではないものの今もかろうじて残されている。

中核区域と考えられる本御所跡（現・水無瀬神宮）と新御所跡（関西電力社宅）の付近には、当時の街区の痕跡を見いだせる。とりわけ、本御所と新御所を繋ぐような位置に、幅約10m、長さ約100mの異常に細長い形状の農地が存在する。これは馬場としても用いられた、水無瀬殿の中核区域を東西に貫く中心街路の痕跡と考えられる。

近年の発掘調査により、2010年には水無瀬殿に関連すると考えられる礎石建物、2014年には山上御所である可能性のある庭園施設の遺構が検出された。また、2016年には先述した馬場の推定地の北側で、これと方向性を同じくする6つの土坑が検出され、約20万点の土器が出土した。

JR島本駅西側の山（当時の和歌などから、これが本来の水無瀬山と考えられる）の麓の桜井には、池中に庭石と推定される大きな石が水没している御所池がある。後鳥羽上皇皇子の六条宮雅成親王の御所が水無瀬に存在したことが文献史料に見えるが、小字名「六条殿」である御所池の辺りに、この御所が存在したと推定する。この池の南側に隣接した農地には、岬状の州浜を有する苑池の痕跡と考えられる地形が現存する。ここに推定される

苑池は、背後の丸岡山や、男山を望む眺望を重視した、周囲の景観や眺望と一体化した風景式庭園としての構造を有するものであったと考えられる。桜井は水無瀬殿にとって重要な核となる場所の一つであったと考えられる。

〔参考文献〕

- ・ 豊田裕章「水無瀬殿（水無瀬離宮）の都市史ならびに庭園史的意義」（奈良文化財研究所学報第96冊『研究論集18 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代—』、奈良文化財研究所、奈良、2016年）
- ・ 同「後鳥羽上皇の水無瀬離宮（水無瀬殿）の構造と選地設計思想について」（『天と地の科学—東と西の出会い』（京都大学人文科学研究所、京都、2019年2月）



図1 水無瀬離宮を中心とした水無瀬地域推定図

国土地理院所蔵のアメリカ軍撮影による昭和21年の空中写真に加筆



図2 馬場としても用いられた街路の痕跡である可能性のある農地（東から西を撮影）
（水無瀬殿の本御所と新御所をつなぐ東西方向のメインストリートと推定）



図3 水無瀬殿の中核域の現状（グーグルアースに加筆）

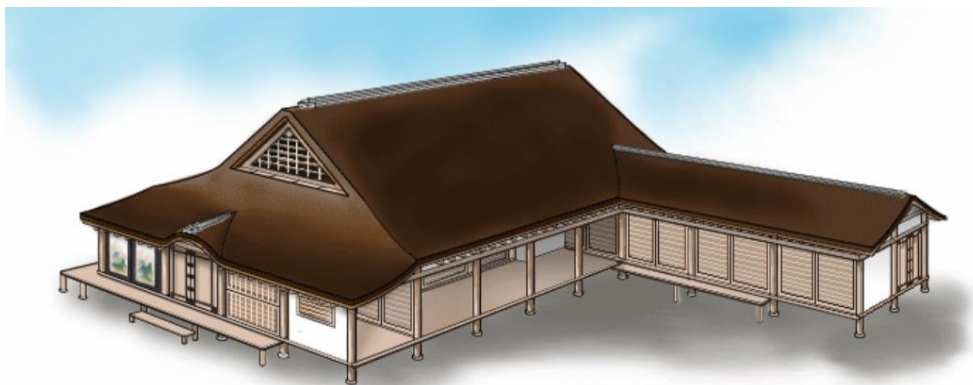


図4 仁和寺文書から推定復元した水無瀬殿馬場殿
（豊田裕章の原画に基づき因千枝子作画）



図4 御所池の水量が減った時に水中から現れた庭石と考えられる大石

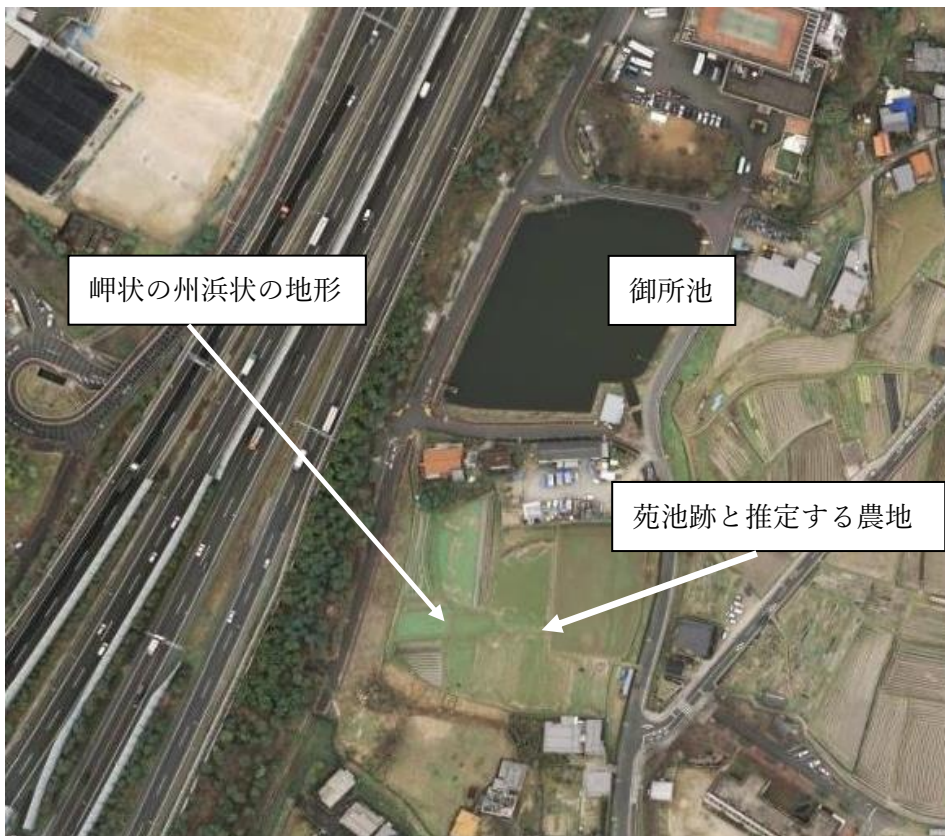


図5 御所池と、南接する岬状の州浜を有する苑池跡と推定する農地



図6 岬状の州浜を有する苑池跡と推定する農地（西から東を望む）



図7 春分の日の出と御所池



図8 春分の日の出と、岬状の州浜を有する苑池跡と推定する農地（西から東を望む）



図9 岬状の州浜を有する池跡と推定する農地（東から西を望む）



図10 御所池周辺の小字名

尾山遺跡池跡

後鳥羽上皇の水無瀬殿(水無瀬離宮)と桜井

—800年前の風景の痕跡をたずねて—

大阪大学招へい研究員

豊田 裕章

1 はじめに

◆「京・鎌倉時代」が提唱される→歴史学で当時の朝廷の重要性への再評価のたかまり
⇒京を付けずに「鎌倉時代」という場合、むしろ1221からとするべきではと考える

◆個性的で多才な後鳥羽上皇・・・和歌などの文芸、相撲、^{かさがけ}笠懸、水泳等の武芸

◆後鳥羽天皇(上皇)の時代

平家の滅亡 鎌倉幕府の成立 『新古今和歌集』の編纂

1221承久の兵乱⇒日本史の大きな転換点

◆後鳥羽上皇は京内外に多数の^{いんのごしよ}院御所を所有

⇒後鳥羽上皇が最も愛好した院御所が水無瀬殿

◆後鳥羽上皇は、水無瀬殿に滞在される時、政務に関してここから京の朝廷に指示

⇒後鳥羽上皇滞在時の水無瀬は日本の国政や文化の中心であった

2 水無瀬殿(水無瀬離宮)の概要

◆壮大で広がりのある構造

◆本御所・新御所・南御所等の複数の御所や馬場殿・^{こごしよ}小御所等の付属施設から成る中核区域

・・・現在の水無瀬神宮(本御所の跡)から関電の社宅(新御所跡の推定地)までの辺り

※2010年度の国木原遺跡の発掘調査(島本町教委)で、大型建物の遺構が検出された

◆後鳥羽上皇の^{ごがんじ}御願寺の蓮華寿院(等身阿弥陀如来像を本尊、千体の地藏菩薩像も安置)造営

◆後鳥羽上皇皇子の^{まさひらしんのう}雅成親王のような皇族や^{みなもとのみちちか}源通親等の貴族の邸宅(宿所)も設けられた。

◆中核区域の外部の^{やまのうえのごしよ}山側に山上御所という眺望を重視した庭園施設を備えた御所も造営される。

※2014年度の西浦門前遺跡の発掘調査(島本町教委)で、庭園遺構が検出された。

3、水無瀬殿(水無瀬離宮)と桜井

◆山上御所→水無瀬殿の御所の一つ。桜井の山側にあった可能性。西浦門前遺跡は有力候補地。
※離宮廃絶後は、安養寺という寺院(高浜とする説もある)になった可能性も考えられる。

◆水無瀬山 藤原家隆の「水無瀬山 堰入れし滝の秋の月 思ひ出づるも 涙落ちけり」

(家隆の歌集である『玉吟集』—^{みにしゅう}壬二集ともいう—の安貞元年1227頃の歌)

⇒この歌でいう水無瀬山は人工的に導水された滝のある山。桜井の背後の山か

◆西浦門前遺跡に連なるような位置にある御所池や岬のような地形のある農地

・御所池と、それに南接する岬のような地形のある農地(小字御所内)→苑池跡の可能性が高い

・庭園史の第一人者であった森 蘊^{おきむ} 1961 氏の見解、1962と越谷遺跡報告書1997の見解

a 森蘊氏「平安時代初期の宮苑遺跡である旧嵯峨院園池(大沢池)などと類似のもの」

「付近一帯の地名には、御所内、御所池、六条殿、薬師堂之庭、御堂前、苔山などがあり、…
由緒ある御所として利用し、または園地として鑑賞したと推定される」

b越谷遺跡報告書「平安時代に桜井御所があったと推定されているが、直接関連する遺構・遺物は検出されていない」

※越谷遺跡の発掘の際に、岬のような地形のある農地(小字御所内)のすぐ西側の第2地区の調査地点から、鎌倉時代の多数の柱穴が検出され大量の遺物が出土

⇒これらを鎌倉時代の庭園遺構と考えると整合的に理解できる

◆「六条殿」という小字名→後鳥羽上皇皇子の六条宮雅成親王の邸の場所か

◆蓮華寿院もこの池のほとりに建てられていた可能性が考えられる

◆桜井寺(薬師堂庭・塔山等の地名が残る)が12世紀に造営される(十卷本『色葉字類抄』)

※小字「六条殿」・「薬師堂庭」・「御所池」等で、平安時代末から鎌倉時代の瓦や土器などの遺物が採集されていた(『島本町史』)。このような遺物は桜井寺とも関わるか

※桜井の山側には桓武天皇皇子の円満院宮の桜井御所があったという地元の伝承

⇒桓武天皇の時代に円満院はないが、次のような点がこの伝承に混融したか

a 桓武天皇が水無瀬に遊獵を行った

b 白河天皇皇子の円満院宮行慶が桜井寺と関わりがあった

c 後鳥羽上皇皇子の覚仁法親王が桜井寺を継承して、桜井寺が桜井宮と呼ばれた

12世紀に造営された桜井寺も、水無瀬殿の関連施設の中に取り込まれていた可能性。

◆源通親は自身の水成瀬山荘を後鳥羽上皇に提供してからも、水無瀬に邸宅(内府泉)を所有

⇒洪水の被害を受けにくい泉の湧く邸宅。桜井にあった可能性も考えられる

結びにかえて

水無瀬殿(水無瀬離宮)は、日本の歴史にとってきわめて重要な歴史的遺産

島本町は、水無瀬殿に関わる遺構、景観、痕跡が地下や地上に残る貴重な地域